Ⅳ-66　彌彦神社および蒼柴神社のシークエンス景観の研究

日本住宅公団　正　○小野沢　透
大成道路　正　金安泰彦
新潟大学工学部　正　鈴木　哲

Ⅰ. はじめに

歩行に伴い展開するシークエンス景観の典型的な例としてわが国の神社参道が指摘され、さまざまな研究がなされてきた（注1,2,3）。新潟県における代表的な神社である彌彦神社と、長岡市における代表的神社である蒼柴神社について、そのアプローチ空間をシークエンス景観と考え、その構成を調査した。

Ⅱ. 調査方法

参道を段階的に写真（ニッコールf 50 m/m）にとり、その画面に占める各景観要素の占有面積率とその変化のしかたを求め、それから景観の構成とその変化を調べた。また照度等を測定し、明・暗による効果等を考えた。

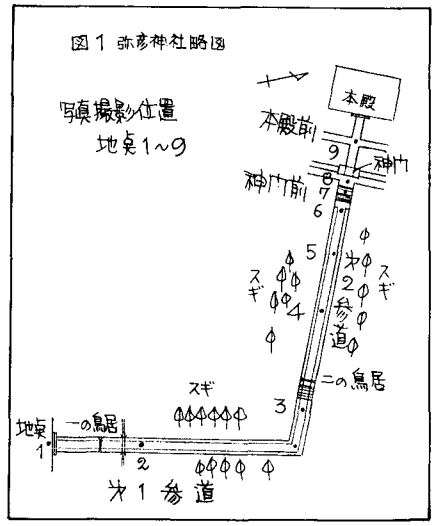
Ⅲ. 調査・結果

（1）彌彦神社の場合

① 概要：彌彦神社は、古代畿内主権の北進の前進基地として建立されて以来、越後の一の宮として尊信を集めてきた。建立以来33年毎に建てかえが江戸初期まで続いた。ほぼ南面し、大和の方向をむいていた旧社殿は、1912年（明治45）の大火で消失し、現社殿は、1916年（大正5）に伊藤忠太により彌彦山を背にほぼ東面して再建された。

② 景観要素別空間占有率：各要素の写真面を占める割合は、図2のようになる。今、本殿までのアプローチ空間の場を大きく4つに分ける（〈第1参道・第2参道・神門前・本殿前〉）と、各場における各景観要素の占有順位は、表1のようになる。1位が、ほぼその場における主要景観要素と考えられる。即ち、第1・2参道では樹木（暗さ、深山の感じ等）が主要構成要素であり、俗界をはなれ神域に近づいたことを感じさせる。神門前では門と石段の比重が大きくなる。石段は参拝者にとって肉体的心理的困難体験となり困難を自らの努力で克服した時、最後の心理的クライマックスは高くなる。神門に近づくにつれ、門を通して本殿の一部が見えかくれし、また山も門の上に見えかくれする。これは最後の場の予告になっている。門の直前が最も暗く、門を通過するとまぶしいように視野がひらけ、本殿・彌彦山・空が眼前にある。

③ 問題点：彌彦山そのものを重要な景観要素にとりいれたことはすぐれている。しかし、戦後観光用のケーブルカーを山頂まで



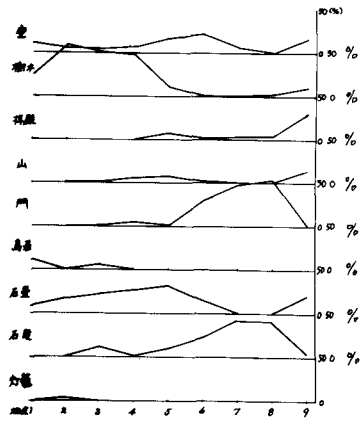


図2：彌彦神社各景観要素占有率
（横軸は撮影地点、縦軸は占有率％）

場＼要素	空	樹木	本殿	彌彦山	神門	石垣	石段
第1参道	○	◎				◎	
第2参道		◎				◎	○
神門前				○	◎		◎
本殿前	◎		◎	○			

表1：要素の占有順位　◎ 1位　◎ 2位　○ 3位

ひき、その山頂駅とワイヤーが本殿の上に見える形になった。神体ともいうべき彌彦山にかかる人工物がまる見えに構築されたことは神社の景観構成としては致命的であり、別に再建するか、植生等でカモフラージするかを検討すべきであろう。

（2）蒼柴神社の場合

① 概要：1769年（明和6）に、長岡藩主が長岡城内の神社を悠久山に移したのが現蒼柴神社のはじまりであり、以来周辺の人々の尊信をうけてきた。明治以後、裏山に神社側の寄進による「悠久山公園」（市管）を設けたので、現在は神社を含め一帯がリクリエーションの場となっている。

② 景観要素別空間占有率：図3の地点で撮影した写真で占める割合は、図4のようになる。今本殿までのアプローチ空間の場を、第1・2・3各参道，神門前（門は転後雪圧で崩壊し、今は礎石が残っている），本殿前にわけてみると、各場における各景観要素の占有順位は、表2のようになる。

第2・3参道の主要要素は樹木で、暗さや深山の感じで、心理的緊張を伴い、一種の困難体験となる。第3参道後半の石段はけわしく肉体的労苦を伴い、肉体的困難体験となる。現在神門は存在しないが、古い写真から判断すると、門が有った時は、門前では門が主要要素となり、本殿前にでると、本殿を中心に樹木と空が主要要素となる。

③ 明暗効果：5月における前方照度は次のようであった。第1参道：晴30.000 Lux. 曇4.000，第2参道：晴19,000，曇2.400，第3参道：晴7,000. 曇900，本殿前：晴30.000. 曇3.500。晴天時も曇天時も共に第1参道が最も明るく、第2・3参道にすすむにつれ暗くなり、第3参道が最も暗く、門を通り、本殿前に達すると再び明るくなっている。

④ 灯籠の密度：第1参道には2対あって53mに1対の割合。第2参道には7対あって28mに1対の割合。第3参道には1の対あって13mに1対の割合。本殿に近づくにつれ、灯籠の密度がましている。

⑤ 参道の勾配：第1参道1.54%，第2参道0.74%で、共にわずかな上り勾配。暗い第3参道は6.27%と急に上りとなり、石段では36%となる。石段をすぎると1.88%となり、再びゆるい上りとなる。

⑥ 以上から、第1・2参道を通過することで参拝者に神域に入ることの心的準備をうながし、第3参道では暗さで心理的緊張を、石段で肉体的労苦を体験させ、神門を通過して一挙に心的クライマックスに達するように配慮されていることがわかる。

× × ×

神社の構成から、この他いろいろの点を学ぶことができると考える。

図3 蒼柴神社

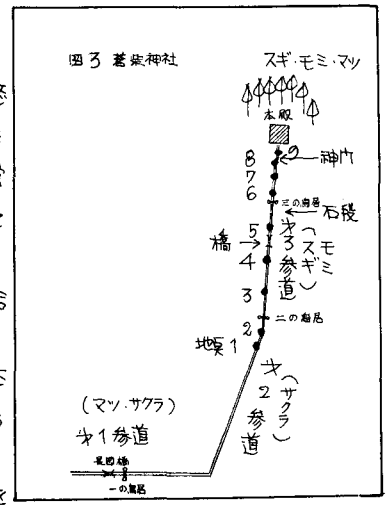
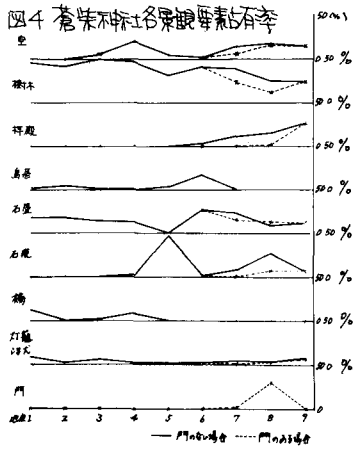


図4 蒼柴神社各景観要素占有率



場＼要素	空	樹木	本殿	門	石壁	石段
第2参道		◎			◎	
第3参道前半	○	◎			◎	
〃 後半	○	◎				◎
門前（門がない時）	○	◎				◎
門前（門がある時）	◎		○	◎		
本殿前	○	◎	◎			

表2：要素の占有順位 ◎ 1位 ◎ 2位 ○ 3位

（注1）アプローチとしての歩行空間に関する基礎的研究，鈴木忠義・樋口忠彦・北村眞一，第29回土木学会年次学術講演会概要集 IV 163，1974

（注2）景観の構造，樋口忠彦，技報堂，1975

（注3）シークエンス景観，樋口忠彦，土木工学大系13，彰国社，1977